Akhtar Hossain,

Macroeconomic Issues and Policies : The Case of Bangladesh.

New Delhi : Sage Publications, 1996, 333 pp.

黒崎　卓

南アジア経済を分析しようとする者にとり，インド以外の経済の全体像を把握できる研究書は非常に限られている。バングラデシュやパキスタンのマクロ経済の最新の概要をつかむだけであれば世界銀行などのカントリー・レポートでこと足りるが，一歩踏み込んだ理論的・構造的分析となるとそれほど数は多くない。バングラデシュの場合，1971年の独立後，左派系のマクロ経済分析が多少見られた程度である。

本書はこの空白を埋めるべく，バングラデシュのマクロ経済を最新の近代経済学理論と統計的手法に基づいて分析する研究書である。本書全体を総括する「前書き」に始まり，「成長と構造変化」と題する第Ⅰ部で，生産および雇用における構造変化（第1章），経済成長と社会開発（第2章）の2つの問題が議論される。この第Ⅰ部がいわばバングラデシュ・マクロ経済の概観に当たる。「マクロ経済の論点と政策」と題する第Ⅱ部は12章からなり，その最初の章が第Ⅱ部全体の概観に当てられ，最後の章が結論に替わるもので「統治，政治，経済開発戦略」と題されている。これら2つの章にはさまれて取り上げられる10のトピックは，(1)緑の革命と所得分配，農村の貧困，(2)金融発展と経済成長，(3)地価と民間貯蓄，(4)貨幣需要関数の安定性と金融政策，(5)通貨膨張とインフレーション，(6)財政政策と国内資源動員，(7)土地課税の政治経済学，(8)貿易と対外収支，(9)対外債務の分析，(10) IMF—世銀構造調整，である。

以上の構成からわかるように，本書の第1の特徴は，バングラデシュのマクロ経済を重要な論点ごとに分析するスタイルにある。したがって，あまり時間のない読者は，「前書き」と第Ⅰ部，および第Ⅱ部の最初と最後の章を読むことで，とりあえず何が問題となっているかを押さえることができる。その上で，各自の関心のあるテーマに相当する第Ⅱ部の章をじっくり読むという読み方ができよう。

しかしながら，そのような読み方は本書の価値を大いに損なうかもしれない。なぜなら，第Ⅱ部で扱われる10のトピックには，バングラデシュに代表される農業に依存した低所得国全般に共通する課題が万遍なく取り上げられており，さらには南アジア諸国全体の最重要課題がほぼ網羅されているからである。特に，マクロ経済分析の中に，緑の革命と所得分配の問題，地価や土地課税の問題などが含まれている点は，パキスタンやインドの経済分析にも通じる重要な視角を提示するものといえよう。

本書の第2の特徴は，これらのトピックが，マクロ経済学理論と近年の統計的・計量的手法を用いた分析枠組という一貫した手法で分析されている点である。とはいえ難解な理論モデルや統計的手法が用いられているわけではなく，初・中級のマクロ経済学の知識および計量経済学と開発経済学の基本面の理解があれば十分に咀嚼できる。言い換えれば，マクロ経済学理論を途上国の分析に当てはめるための一つの参考例として，本書は興味深い研究書となっている。いうまでもなく日本のマクロ経済学の教科書は日本経済・英米経済を主に議論し，欧米の英語による教科書もまた先進国経済の例示に拠っている。そのような教科書とこのような研究書を併用することで，途上国経済分析のための生きたマクロ経済学を学ぶことができよう。

ただし，この評価は本書の個々の分析に問題がないことを意味しない。著者の専門は金融政策やインフレーションなどにあるため，農業に関わるトピックでは二次的研究に依存している部分が多い。南アジア地域研究者から見れば，細かい点で首をかしげざるをえないところもある。とはいえ，全体として見れば，本書はバングラデシュのマクロ経済に関する好著である。余談であるが，評者は，その分析と結論のほとんどがパキスタン経済にもあてはまることに驚かされ，南アジア主要諸国のマクロ経済比較の出発点として本書から学ぶところが多かった。

（アジア経済研究所総合研究部）